

〈境界域〉としてのストリート

— 〈平凡〉な事例を調査するための社会分析の再構築 —



◇レナート・ロサルド（椎名美智訳）、『文化と真実 — 社会分析の再構築』（日本エディタースクール出版、1998年）

川端 浩平

ヒスパニック系アメリカ人の人類学者、レナート・ロサルドの『文化と真実 — 社会分析の再構築』の序章に次のような印象的な一文がある。「しかし実際に、ひとは自分にとって一番大事なことを、つねに一番詳しく述べるものなのだろうか」（p.8）。ある調査目的のためにフィールドワークを行い、その対象について記述する者ならば常に問い返される不安・疑問であろう。私たちはそのような不安を払拭することと、より説得力のある記述によって疑問に答えようとする真摯さのあいだで悩み、考え、そしてその繰り返しの果てに、全体の構図が浮かび上がってくるのを待つ。本書でロサルドが社会分析の再構築を試みるという壮大なプロジェクトのなかでたたき台としているのは、そのような不安と真摯さのうえに先人達が構築してきた「文化的深遠さ」や「文化的洗練」を「分厚く」記述することによって文化を描き出すという方法である。そのような既存のアプローチに対してロサルドは、文化についての記述は「濃密」さのみではなく、その「迫力」を探り出すべきであるという方法を提示する。この小論では、ストリートの調査における調査者と対象者の関係性を改めて問い直すために、本書におけるロサルドの試みを（1）調査者のコミットメ

ント（2）対象の記述、という二つの観点から読み解いてみることにする。

フィールドワーカーは、対象者とどのような関係性にあるのか。あるいはどのような関係性を構築することによって何を見ようとするのか。ロサルドはかつてフィリピンで首狩りの儀式を行っていたイロンゴット族の年配の男たちに問う。なぜあなたたちは首狩りをするのか。その質問に対して男たちは、いかに近親の死別における怒りが首狩りへと駆り立てるのかを語った。しかしこの説明はロサルドにとっては退屈なものだった。それは、「単純すぎて、厚みがなく、不明瞭で、信じがたく、ステレオタイプなもの、さもなければ不十分なものに思われたので、無視していた」（p.9）。それまでの彼は、人類学者の唱える交換理論をこの事例にあてはめることに懸命で、「首狩りは、ひとつの死（首狩りの犠牲者の死）によって、もうひとつの死（近親者の死）を帳消しにするやり方から生じたという考え方」を前提としていたのである。しかし、彼の最愛のパートナーである人類学者のミッシェル・ロサルドがフィールド調査中の事故によって亡くなってしまったという自分自身の激しい喪失の体験から「悲しみのなかにある怒りの激しさ」が理解できるようになり、

年配の男たちの言葉の意味を理解できるようになったという。まさにその瞬間、かつてはとも平凡であると考えていた言葉が「迫力」を持って立ち現われてくるのである。このようなロサルドの調査対象者へのコミットメントは、自分（調査者主体）の「弱さ」(vulnerability)を「他者」(調査対象者)に開示していくことを契機として、調査者の思い込み、思惑、価値観とともに理論的な枠組みが問い直され、フィールドのリアリティへとさらに一步踏み込むことを可能としている。

ロサルドによる対象の「迫力」への接近法は、対象をどのように記述するのかということにもかかわってくる。ある特定の対象を記述するとき、その対象を差異化し特徴づけるための分類枠組みが必要となってくる。そしてそれは質量的なバランスでインパクトを持って読者に提示されることが求められる。ロサルドは、境界線によって調査対象を囲み、均質な集団・現象としてとらえたうえで「濃密」に記述するのではなく、フィールドとそこで生きる人びとの営みを「性的志向、ジェンダー、階級、人種、民族、国籍、年齢、政治、服装、食べ物、趣味」といった枠を中心に現れる「境界域」としてとらえている。このアプローチでは記述対象のハイブリッド性を描き出すことが可能となる。ハイブリッド性を描き出すという方法のメリットは、対象を均質的な文化集団としてではなく、多様性をエンパワーするという視点が担保されることである。しかしそのような多様性を担保するための戦略も、例えばマイノリティのアイデンティティ政治に対するマジョリティのバックラッシュが典型的なように、ある集団の多様性を探すという視点から、多様性そのものが前提とされることにより、「意図せざる結果」として異なった多様性同士が競合・衝突することも肯定されてしまう。しかし、ロサルドのアプローチをハイブリッド性の抽出という点のみではなく、「境界域」という定義しがたい

領域や対象を描き出す方法論として敷衍していくのならば、例えば社会調査や分析によって無視されがちで雑多なものや平凡だと考えられている対象の「迫力」を描き出すという方向性も可能である。

ロサルドの方法論を敷衍してみるならば、これまでの社会調査や分析から抜け落ちてきた「平凡」な日常実践の領域へと介入することができる。「平凡」な日常実践のリアリティのもつ「迫力」をいかに描き出すことができるのか。そしてまた、何のためにそれを描き出す必要があるのか。著者はこれまで、自分が育った「地方」におけるフィールド調査で、論文を執筆するための事例としてはあまりにも「平凡」で、理論的な枠組みとは矛盾する大多数の現象や語りに出会うたびに、その対象が放つなんともいえない「迫力」を新しい枠組みを持って示せるのかに苦心してきた。おそらくそのための方法はいくつもあるだろうが、肝心なのは「平凡」な領域に閉じ込められた主体を本質化するのではなく、権力関係によって指定される二項対立を乗り越えるための方法であるということを確認することである。例えば調査者と対象者、マジョリティとマイノリティ、中心と周縁、都市と地方などのあいだに指定される「境界域」への介入を、両者の二項対立を乗り越えかつ多様性を担保するための調査研究方法として再構築していくこと。その過程で調査者がとても平凡だと思い込んでいた言葉や事象が「迫力」を持って立ち現われてくるかもしれない。ストリート＝「境界域」への介入は、そのような新しい理論と実践の地平を切り開くことを可能とするだろう。

お薦め図書

- ド・セルトー、M、1980（山田登世子訳）、『日常実践のポイエティック』、国文社。
 藤田敬一、1987『同和はこわい考』、阿吽社。
 保苺実、2004『ラディカル・オーラルヒストリー—

先住民族アボリジニの歴史実践』、御茶の水書房。

Michael Billig, 1995, *Banal Nationalism*, Sage Publications.

玉野井芳郎、1978「地域主義のために」玉野井芳郎・清成忠男・中村尚司共編、『地域主義—新しい思潮への理論と実践の試み』、学陽書房。

(かわばた・こうへい 関西学院大学大学院社会学研究科大学院 GP 特任助教)